

民謡「旋律」の伝承研究
——〈おばば〉をとおして——

服 部 克 巳

**A Study of How Melodies in Japanese Songs Have Been Handed
Down in Japanese Society**

——OBABA——

Katsumi Hattori

Summary

The purpose of this Study is to investigate Melodies in Japanese Folk Songs through “OBABA”.

I want to study further how melodies were used in olden times through comparative study of them.

Received Oct. 31, 1998.

Key words : Folk Songs, OBABA, Melodies,

Ⅰ は じ め に

民謡というものは、同じ唄であっても、隣の地区と較べると旋律が少し異なるということ
はよくあることである。また、同じ地区であっても、演唱者にはその人なりの癖があり、旋
律に多少の変化が生じてくる。さらに、演唱者がいつ、どこで、どのような方法で覚えたか、
によっても差異が生じる。つまり、ここに掲載した旋律は、必ずしもその市町村の人たち
がすべてこのように歌っているとは限らない。また、演唱者の中にも歌詞、旋律などをあい
まいな記憶で歌う人もいる。

この調査では、その都度演唱者にそれらの条件も確認して聞きだし、できるだけ正確な
資料となるよう配慮したつもりである。

こうした日本古来の旋律を、平均率の五線譜で書き表わし、比較検討することは無理があ
ると思うが、本研究では、「おばば唄」の旋律をセント (cent) の単位までつかって比較検討

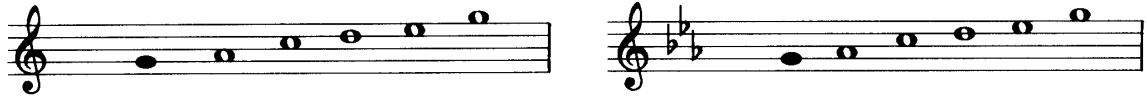
する必要は感じていない。本研究のねらいは、各地に伝わる民謡「おばば」の旋律の違いを明らかにすることである。さらに、歴史的な事実をふまえながら、古い時代の民謡「おばば」とはどのような旋律であったかを探ろうとするものであるからである。

II 陽類おばば唄について

採譜したおばば唄の譜は実際に歌われた音高で記譜するとそれぞれ異なり比較がしにくいので、陽類も陰類もともに基準となる音を g^1 (ト) とした。拍子も 4 分の 2 拍子で統一した。(本論文の中の用語および理論は、東川清一氏『新説・日本音階論』による。)

陽類

陰類



1 陽類おばば唄

譜10

$J=69$

おばば どこい きやる ナー ー ー おー ばば どこい きやる ナー
よめの ざい しょへ ナー ー ー よー めの ざい しょへ ナー

さんじょ だる さ ー げ て ソ ラ バ エー ヒョロヒョロヒョー ヒョロヒョロヒョー
はつまご だ ー き に ソ ラ バ エー ヒョロヒョロヒョー ヒョロヒョロヒョー

上譜は広島高等師範附属小学校音楽部が昭和8年(1933)に編纂した『日本童謡民謡曲集』から転載した。採譜者・村上國蔵氏についてその後調査した結果、当時は岐阜市司町に住み、明治44年(1911)3月に岐阜男子師範本科2部卒業と判明した。この本に関わられたひとりであったが、しかし調査時にはすでに亡くなっておられ、追跡調査ができず残念であった。採譜されたのがいつ頃か不明だが、おそらく発行の1~2年前であったと考えられる。

大正14年(1925)、その頃は今上天皇の銀婚式、奉祝国産共進会が行なわれた。この機に岐阜音頭(陰類)が井出蕉雨作詞、杵屋喜多六節調、西川石松振り付けで作られた。そして岐阜音頭は大々的に宣伝され広められ、流行っていたと考えられるが、この陽類の譜はそのような当時の状況に影響されず、はっきり区別されている貴重な資料である。

ちなみに、岐阜音頭では、はやし言葉がヒュルヒュルヒューとなっているが、このおばば唄はヒョロヒョロヒョーである。このヒョロヒョロヒョーは、おばばが重い三升樽を持って

民謡「旋律」の伝承研究

ヒョロヒョロと足をふらつかせながら行く様をはやし言葉としたのか、笛の音を模したのか不明である。

譜13

$\text{♩} = 69$

おばば どっこいきゃる ナー ナー ー おー ばば どっこいきゃる ナー
よめの ざいしょへ ナー ナー ー よー めの ざいしょへ ナー

さんじょ だる さー げ て ソー ラ バ エー
サ サ ま ご だー き に ソー ラ バ エー

ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー
ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー

平成9年(1997)9月笠松民俗資料館で調査資料を確認していたとき、演唱者である高島英一氏が偶然来館された。氏にさっそくお願いし、翌10月に収録した唄である。高島英一氏は大正9年(1920)生まれの77歳である。

笠松町で今までに調査したおばば唄はすべて陰類であったが、高島氏が歌われたのは陽類のおばば、ここに至ってはじめて陽類のおばば唄に接することができた。

譜14

$\text{♩} = 76$

おばば どっこいきゃる ナー ナー ー おー ばば どっこいきゃる ナー
よめの ざいしょへ ナー ナー ー よー めの ざいしょへ ナー

さんじょ だる さー げ て ソー ラ バ エー
サ サ ま ご だー き に ソー ラ バ エー

(この部分は笛だけで歌わない)

この唄は笛で演奏されたものを採譜した。笠松町上柳川町の吉井朗氏宅で、吉井氏が若い頃に演奏されていた旋律を思い出しながら吹いてもらい、本人と何度も検討を重ねながら、楽譜にした。唄の方は山田一雄氏大正15年(1926)生まれにお願いした。

こうした笛による伝承は、町内の長老や先輩から引き継がれているものであり、唄とは違って古い時代の旋律をかなり忠実に伝えてきていると推測されるが、 f^1 (へ) 音を使用しているあたりをみると、時の経過、時代の波には勝てず少しずつ変化しているようである。

なお、この譜14と同じく譜15も f^1 (へ) 音がでてくるが、他の陽類の唄はすべて e^1 (ホ)

を使用している。この理由は「3旋律の比較考察－B区分」で述べることにする。

譜15

♩=76

おばば どっこい きやる ナー ナー ナー おー ばば どっこい きやる ナー
 よめの ざい しょへ ナー ナー ナー よー めの ざい しょへ ナー

さんじょ だる さー げ て ソー ラ バ エー (この部分は、笛と太鼓だけで)
 ササ まご だー き に ソー ラ バ エー (ソレ) 奏し、唄は歌わない。

この唄は笠松祭りの日に、県町の“ボボ車”（資料3 写真1 参照）のまわりで数人の人が笛に合わせて歌っていたものである。笠松町では、現在若い人たちは歌えないし、40代50代でも歌える人は非常に少ない。また歌う機会もほとんどなく、忘れられていってしまう歌であろう。というのも、笠松町では、他の町村のようにおばば唄を宴席で歌うことはなく、祭りの日だけしか唄わなかったということだからである。しかも、歌う人は現在“ちょうさい（資料3 写真2 参照）”や“ボボ車”を持っている町の在住者であるからかなり限定される。そのうえ、人手不足で運営も困難で祭りには毎年参加できず、3年ごとのローテーションで参加というから推して知るべしである。しかし、このような状況で笛も唄もなかなか覚えにくい現状の中、3年に1度の祭りに参加するため2ヵ月間厳しい練習を積んで祭りに臨む、という熱意は評価されるべきことである。

譜18

♩=92

おばば どっこい きやる ナー ナー ナー おー ばば どっこい きやる ナー
 よめの ざい しょへ ナー ナー ナー よー めの ざい しょへ ナー

さんじょ だる さー げ て ソー ラー バ エー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー
 ササ まご だー き に ソー ラー バ エー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー

昭和63年（1988）、勤務していた学校の事務官長屋とも子氏の祖母、明治39年（1906）生まれの藤田よねさんが山県郡美山町柿野に在住され、祖母から教えてもらったおばば唄をよく歌っておられる、と聞き収録してもらった譜である。

民謡「旋律」の伝承研究

伝承の経緯を考えると、よねさんの母親そして祖母とさかのぼると一世代約25年として、50年の差がある。よねさんの祖母は安政年間（1856年頃）の生まれである。よねさんが年ごろとなった14歳頃に教えられたとすると、大正9年（1920）頃に覚えたことになる。よねさんの祖母が明治年間を通して歌い続けられ、孫娘に受け継がれたという貴重な資料である。

譜19

$J=92$

おー ばばー どこいきやる ナー ナー ナー おー ばば どこいきやる ナーイ
よー めのー ざいしよへー ナー ナー ナー よー めの ざいしよへ ナーイ

さんじょ だる さーげ て ソンダ モ エー
アレイ まご だーきに ソンダ モ エー (アラ) チョウサイジャ チョウサイジャー

昭和47年（1972）林友男氏が県内で収録されたわらべ唄のテープの中にはいついた唄である。根尾村で収録されたこのおばは唄は他の地域のおば唄と出だしの部分や最後のはやし言葉（結尾）がかなり異なっている。チョウサイジャチョウサイジャについては、本学紀要第30集（1998年3月発行）でふれたが、なにか古めかしさを感じさせる言葉である。

演唱者の洞口福太郎氏は当時81歳であった。

譜25

$J=70$

おばば どこいきやる ナー ナー ナー おー ばば どこいきやる ナー
よめ の ざいしよへ ナー ナー ナー よー めの ざいしよへ ナー

さんじょ だる さーげ て ソーラバエ ハァ ウイテキター ウイテキタ
ソリヤまご だーきに ソーラバエ ハァ ウイテキター ウイテキタ

上譜は『NHK日本民謡大観中部篇』に掲載されている唄である。昭和23年（1948）10月26日、武儀郡大矢田村（現美濃市）で名古屋JOCK局が収録、井川金松氏の演唱である。

岐阜地域とは、はやし言葉が違い、ウイテキタ ウイテキタと歌っている。中濃地域一帯のおば唄ではこのはやし言葉で当時は歌われていたが、その後、美濃・関地域へ岐阜地域のヒュルヒュルヒューの言葉が入りこみ、今はウイテキタはあまり聞かれなくなっている。

譜27

$\text{♩} = 76$

おばば どこいきやる ナー ヤーレ おー ばばー どこいきやる ナー
 よめの ざいしょへ ナー ヤーレ よー めのー ざいしょへ ナー

さんじょだる さーげ て ソー ダ バ エー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー
 はつまご だーき に ソー ダ バ エー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー

上譜は平成4年(1992)林友男氏が関市で収録したものである。

演唱者井桁潔氏は昭和8年(1933)生まれである。

この関市のおばば唄[譜27]と前述の美濃市のおばば唄[譜25]は陽類であるが、後述の関市のおばば唄[譜26]、美濃市のおばば唄[譜24]は陰類である。同じ市内であってもこのように演唱者がいつ、どこで、どのようにして覚え、それをどのようにして歌っているか、によって違ってきてしまうのである。

現在関市在住者でこのような陽類のおばば唄を歌う人はほとんどいないと思われ、貴重な収録であった。ちなみに井桁氏は大工の棟梁をしておられ、若い頃からこのおばば唄をよく歌ってきた、と語っておられる。

譜28

$\text{♩} = 63$

おばば どこいきやる ナー ナー ナー おー ばば どこいきやる ナー
 よめの ざいしょへ ナー ナー ナー よー めの ざいしょへ ナー

さんじょだる さーげ て ソー ラ バ エー (ア) ウイテキ ターア ウイテキタ
 はつまご だーき に ソー ラ バ エー

この八百津町で伝承されているおばば唄は、昭和59年(1984)岐阜県教育委員会文化課が岐阜県民謡緊急調査報告書を作成するために各地域の担当者に依頼して収録されたひとつである。演唱者は赤塚すすさん、明治36年(1903)生まれである。可児郡の兼山町あたりでも譜28と同じように歌っている。

西濃や岐阜地区と異なる箇所は、はやし言葉のウイテキターとそのあとに続く「ひよこた

ん川へつっこんで…」の受け唄がはいることである。

このはやし言葉、受け唄については本学紀要第30集でも述べたが、昔は木曾川伝いに笠松港から兼山や錦織（現八百津町）へは川船が頻繁に通っていた。古くから笠松近辺で歌われていた陽類のおば唄が兼山や八百津近辺へと伝播し、三味線や〇〇音頭^{註1}の影響を受けることなく現在まで伝えられてきたと思われる貴重な資料である。（資料2参照）

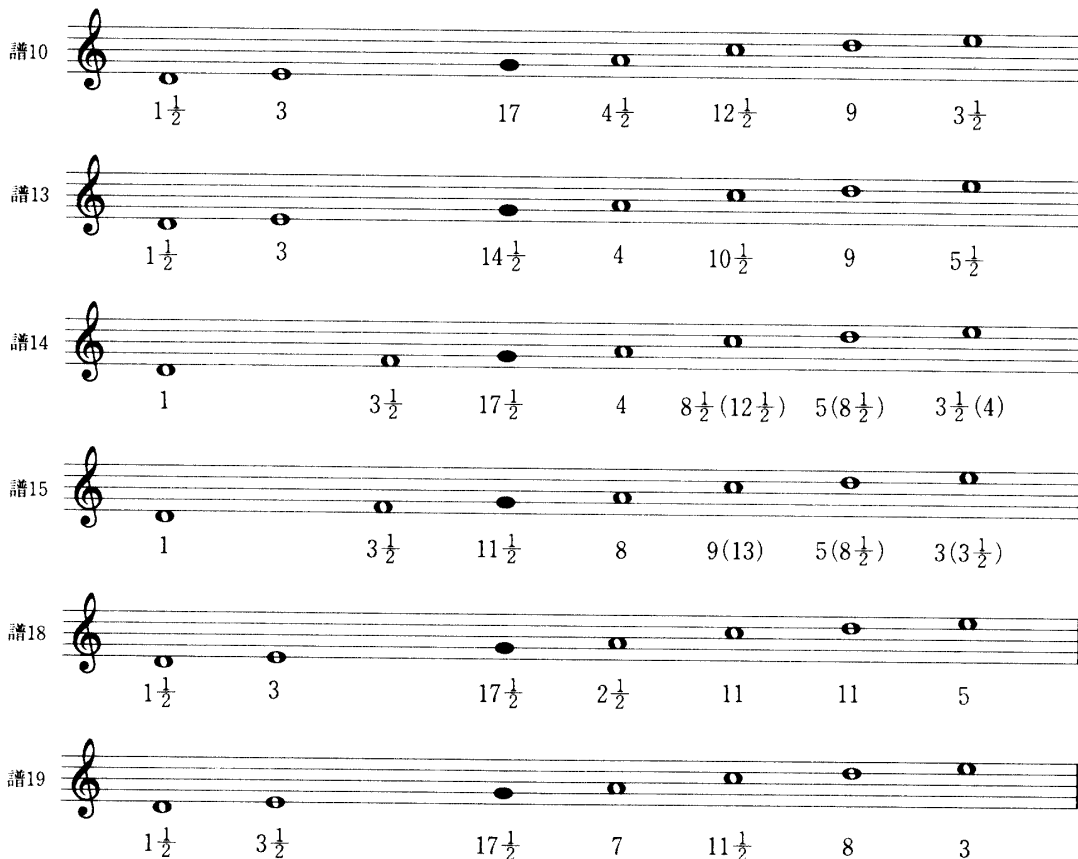
2 旋律の使用音と頻度量

前譜のおば唄9曲について、類の確認と、基準となる音を明確にするために使用音と頻度量を調べた。頻度量とは8分音符の長さを1として使用音の長さを集計したものである。

譜14・譜15には笛の間奏があり、それを含めた頻度量の合計を（ ）内に示した。

その結果は次のとおりである。

- (1) 1番多い使用音は各唄とも g^1 (ト) 音、2番は c^2 (ハ)、3番は d^2 (ニ) であり、頻度量も同様の結果である。
- (2) 譜14・譜15は使用音が d^1 , f^1 , g^1 , a^1 , c^2 , d^2 , e^2 である。 e^1 の音が f^1 に変わっていて、陰類らしき部分がある。



譜25
1 $\frac{1}{2}$ 3 12 4 12 $\frac{5}{6}$ 11 $\frac{1}{3}$ 5 $\frac{1}{3}$

譜27
2 3 $\frac{1}{2}$ 16 4 $\frac{1}{2}$ 12 9 4

譜28
1 $\frac{1}{2}$ 3 16 3 $\frac{1}{2}$ 9 5 3

3 旋律の比較考察

陽類のおばば唄8曲を歌詞と旋律のまとまりからA～Eの5つに区分し整理した。

ただし、譜14は譜15とほとんどおなじなので比較の対象からはずした。

A区分…歌いだしが g^1 音（ト）から始まるもの〔譜13, 18, 27, 28〕、 a^1 音（イ）から始まるもの〔譜10, 15〕、 c^2 音（ハ）から始まるものは〔譜19, 25〕である。

基準となる音の g^1 （ト）と a^1 （イ）の音程は歌い手によって微妙に接近した音で、 g 音とも a 音とも聞き取れる。それに三味線伴奏のつく陰類のおばば唄の影響を受けて a^1 音（変イ）から歌いだす人の歌い方と混交している場合もあった。歌い出しはとかく緊張も加わって、非常にあいまいなものになってしまったのであろう。

しかし、歌い出しはやはり g^1 音から始まる旋律の方がひなびた感じがしてよい。

譜19・譜25は c^2 音から歌いだしすが、古い時代の民謡は高い音から歌い始めることが多いといわれている。これはその名残を留めているのかも知れない。しかも、譜19の本巢郡根尾村のおばば唄は下拍始まり、1拍目から歌いだし他の地区のような上拍始まりではなく、総上拍（General Auftakt）と異なる。根尾村は千年以上も生き続けている名木「薄墨桜」を持つ村であるから民謡にも歴史的なものが残っていることが十分推測される。

B区分…B1で $c^2 d^2 e^2 c^2$ （ドレミド）と歌っているのは〔譜10, 13, 15, 18, 27, 28〕、 $c^2 d^2 e^2 d^2$ （ドレミレ）と歌っているのは〔譜19, 25〕である。

$c^2 d^2 e^2 c^2 \cdot c^2 d^2 e^2 d^2$ の何れも次のB2へ続く旋律としては理にかなって不自然さはない。

B2では、譜13・譜25の場合16分休符が頭に入った歌いだしになっているが、これは三味線の伴奏がつく陰類おばば唄の影響を受けている。

譜15の場合、B2の最後の音からB3へ入る音の流れに $f^1 - g^1$ （ファーツ）がある。

これについては、曲の使用音 $c^1, d^1, e^1, g^1, a^1, c^2$ の中の e^1 がここで f^1 に取ってかえられたことにより、曲は \sharp 均 = $c^1, d^1, e^1, g^1, a^1, c^2$ (ドレミソラド) から \flat 均 = $f^1, g^1, a^1, c^2, d^2, f^2$ (ドレミソラド) へ転均したとみることもできる。しかし、 $f^1 - g^1$ の f^1 を基準になる音 g^1 に対する導音的な性格を持つ音として扱い、臨時的変化音であるとみれば転均したとみる必要はない。今後、陽類も陰類もこの後者の考え方ですすめていく^{註2}。

C区分…C1の出だしが $e^1 g^1 a^1 c^2$ (ミソラド) となっているのは譜10・譜13・譜18・譜19 譜27・譜28で、 $f^1 g^1 a^1 c^2$ (ファソラド) と歌うのは譜15である。

譜15はB区分で述べたように、 $e^1 g^1 a^1 c^2$ (ミソラド) の e^1 は f^1 に導音的变化をして $f^1 g^1 a^1 c^2$ (ファソラド) となったとみる。

譜25C1の最後の音の d^2 (ニ) は歌手の力みによるものか、NHKの採譜者の誤記によるものか、不明である。しかし、この d^2 からC2の g^1 (ト) へ入るのは旋律の流れから考えて不自然である。やはり $e^1 g^1 a^1 d^2$ (ミソラレ) でなく $e^1 g^1 a^1 c^2$ (ミソラド) が自然な旋律の流れと推測する。

D区分…祭り唄としてのおばば唄および中濃・東濃地方のおばば唄では、このD区分のソーラバエーで歌いおわっている。したがって次のE区分のはやし言葉は後に付加されたものと考ええる。すなわち、おばば唄はここで終わっているのだからD区分の最後の音を最終音とみるべきであろう。それが古い形のおばば唄と考える。

E区分…Eは結尾 (Coda) である。D区分で触れたように歌としてはD区分で終わってしまっている。しかし、このおばば唄をお座敷唄として実際に座敷で唄う場合、祭り唄のようにこの部分を笛で吹くことができないので、笛の旋律を口で模して歌うようになったのである。また、それは歌い続けていくための間奏とみることもでき、歌いだすはじめの前奏ともみることができよう。

旋律の形としては、笠松町のボボ車のまわりで吹く笛の旋律のようにE1を反復する [譜10, 15, 25, 27]の方が、反行反復する [譜13, 18]の旋律より古いといえる。つまり反行反復する旋律は大正時代の終わりに杵屋喜多六が節調した時の旋律であり、この旋律が昭和時代初期から華やかな宣伝により人々の口から口へと伝わり、それまで反復していた旋律も反行反復する [譜13, 18]のように変化した。E区分を歌わなかった人たちも反行反復の旋律を歌うようになった。

譜19の根尾村の詞「チョウサイジャ」は笠松町史に記述されているテウサイ (調才) 神輿の存在を神前にアピールするためのはやし言葉と考える。

また、推測でしかないが、調才は「調 (みつぎ) 賽 (神仏の恩を感謝してお礼参りをする)」と書くと意味が伝わり、この意味を含んでいると考える。

服部克巳

	A				B		
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3
譜10	おばば どこいきやる ナー				おー ばば どこいきやる ナー		
譜13	おばば どこいきやる ナー				おー ばば どこへきやる ナー		
譜15	おばば どこいきやる ナー				おー ばば どこいきやる ナー		
譜18	おばば どこいきやる ナー				おー ばば どこいきやる ナー		
譜19	おー ばばー どこいきやる ナー				おー ばば どこいきやる ナーイ		
譜25	おばば どこいきやる ナー				おー ばば どこいきやる ナー		
譜27	おばば どこいきやる ナー				おー ばばー どこいきやる ナー		
譜28	おばば どこいきやる ナー				おー ばば どこいきやる ナー		

民謡「旋律」の伝承研究

C C1 C2 D D1 D2 E E1 E2

さんじょだる さーげて ソーラバエー ヒョロヒョロヒョー ヒョロヒョロヒョー

演唱者

岐阜市
村上国蔵採譜

さんじょだる さーげて ソーラバエー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー

笠松町
高島英一氏

さんじょだる さーげて ソーラバエー (この部分は笛、太鼓だけで奏し唄わない)

笠松町
県町の笛

さんじょだる さーげて ソーラバエー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー

美山町
藤田よねさん

さんじょだる さーげて ソンダモエー (アラ) チョウサイジャ チョウサイジャー

根尾村
洞口福太郎氏

さんじょだる さーげて ソーラバエー ハア ウイテキター ウイテキタ

美濃市
井川金松氏

さんじょだる さーげて ソーダバエー ヒュルヒュルヒュー ヒュルヒュルヒュー

関市
井桁潔氏

さんじょだる さーげて ソーラバエー ア ウイテキターア ウイテキタ

八百津町
赤塚すずさん

陽類おばば唄はE区分の前のD区分D2で終止しており、E区分のはやし言葉の最後の音は半終止である。したがって陽類おばば唄は均ソ旋法である。ちなみに笠松町の笛の実音の旋律はd¹（ニ）からはじまる#均ソ旋法である。

III 陰類おばば唄について

1 陰類のおばば唄

譜1

J=76

おばばどこいきやる ナー ナー おーばば どこいきやる ナー
 よめのざいしょへ ナー ナー よーめのざいしょへ ナー

さんじよだる さーげて ソン ダ マ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 はつまご だーきに ソン ダ マ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

昭和59年（1984）『岐阜県民謡緊急調査報告書』に収録された唄である。岐阜市島地区在住の岩田禮子さん、大正4年（1915）生まれの演唱で収録されている。

譜2

J=不明

おばば どこいきやるーナーー ナーナー おーばば どこいきやる ナー
 よめのざいしょへーナーー ナーナー よーめのざいしょへ ナー

さんじよだるー さーげて ソン ラ バ ーエー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 ササまごー だーきに ソン ラ バ ーエー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

昭和13年（1938）に岐阜女子師範学校出版『岐阜県郷土研究』の「岐阜地方の民謡」の項に掲載、採譜者は松田鐵雄氏である。楽譜からみて、おそらくお座敷で歌っていた三味線唄からの採譜と推測される。昭和10年代にはすでに美濃地方一帯に陰類おばば唄の歌い方が広まり、次第に陽類の歌い方やはやし言葉が陰類に変化していったのである。

民謡「旋律」の伝承研究

譜 3

J=50

おばば どこきやる ナー ナー おばば どこきやる ナー
よめの ざいしょへ ナー ナー よめの ざいしょへ ナー

— さんじよだる さーげて ソウ ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
— はつまご だーきに ソウ ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

この譜は昭和36年（1961）に岐阜県音楽教育連盟から出版された『みんなで歌おう（小中学校版）』に掲載されたものである。

他の楽譜と異なっている部分は8小節目が入っていることである。他の譜はすべて13小節で終わるが、この楽譜だけが1小節多く14小節である。歌詞の形から小節数をみると、他のおばば唄はすべて4，3，4，2であるのに、この〔譜3〕だけが4，4，4，2となっている。実際に歌われている唄の小節数を4，4，4，2の形にしたとしか考えられない。

なお、11小節目のソウラバエーの部分ラの音が ラ にならず陰類のままである。松島昇編曲となっているが、歌われた場所、演唱者は不明である。

譜 4

J=不明

おばば どこへきやる ナー ナー おばば どこへきやる ナー
よめ のーざいしょへ ナー ナー よめ のーざいしょへ ナー

さんじよだるー さーげて ソーラバ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
ササまごー だーきに ソーラバ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

昭和50年（1975）に雄山閣発行『日本民謡全集3 関東中部編』に掲載され、松尾健二編曲の譜である。

服部 克巳

譜5

J=54

おばば ーどこいきゃーるナ ー ナ ナ ー おーばば ーどこいきゃる ナー
 よめの ーざいしょーへナ ー ナ ナ ー よーめの ーざいーしょへ ナー

さんじょだる さーげて ソオラバ エー ヒュルヒュルヒュ ヒュルヒュルヒュ
 ササまご だーきに ソオラバ エー ヒュルヒュルヒュ ヒュルヒュルヒュ

昭和62年(1987)日本大衆音楽協会発行『岐阜県民謡集』に岐阜市の「おばば(岐阜音頭)」として掲載されている。上記の歌詞に続いて、「岐阜はよい所じゃ〜」「四季の風情は〜」「聞いて稲葉の〜」「鵜船来る来る〜」と歌われている。この譜は三味線伴奏による唄で、2小節目、5小節目、6小節目、10小節目にタイや休符を入れている。

このような唄が昭和の始め頃から大いに宣伝された。大正14年のラジオ放送の開始、昭和11年には国民歌謡の始まりなど大衆音楽の流布が民謡の世界にも及んでいると考えられる。それまでひなびた歌い方であった各地の俚謡おばば唄に影響を与えた。洒落た感じのタイや休符を入れたり、反行反復のはやし言葉を真似して歌われるようになり、陽類のおばば唄から陰類のおばば唄へと変化していくことになったのである。

譜6

J=72

おば ばどこいきゃる ナ ー ナ ー おーばば どこいきゃる ナ
 よめ のざいしょへ ナ ー ナ ー よーめの ざいしょへ ナ

さんじょだる さーげて ソラバ エー ヒュルヒュルヒュ ヒュルヒュルヒュ
 はつまご だーきに ソラバ エー ヒュルヒュルヒュ ヒュルヒュルヒュ

この譜は上記と同じ『岐阜県民謡集』に掲載され、千藤幸蔵氏の採譜である。

同じ岐阜市の唄でも譜5と区別されて「おばば」とのみ書かれ、岐阜音頭の文字は見当らない。前記の譜のように三味線唄のような時間的ズレを入れた歌い方をしていない。しかし、笠松町の陽類おばばとも異なり陰類になってしまっている。はやし言葉も反行反復になっており、かなり変化していることがわかる。

民謡「旋律」の伝承研究

譜7

J=63

おばばーどこへきゃるナー ー ナ ナー おばば どこへきゃる ナー
 よめのーざいしょへナー ー ナ ナー よめの ざいーしょへ ナー

さんじょだるーさーげて ソーラバ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 ササまごーだーきに ソーラバ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

この譜は昭和35年（1960）発行、日本放送協会編『日本民謡大観 中部編』に掲載されている。演唱者は芸妓の小蝶さんで、三味線伴奏にのせてお座敷で歌われたものである。

譜8

J=60

おばばーどこへきゃる ナ ー ナ ナー おーばば どこへきゃる ナー
 よめのーざいしょへ ナ ー ナ ナー よーめの ざいーしょへ ナー

さんじょだるーさーげて ソーラバ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 ササまごーだーきに ソーラバ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

芸妓金太郎演唱のテープから採譜したものである。いつ頃、どこで収録されたか不明である。前出の譜5・譜7と同様、お座敷で三味線にのせて歌われたおばばである。

これらの唄がレコードになり、ラジオで流され、またお座敷で三味線にのせて歌われた結果、陽類の俚謡おばば唄は姿を消していくことになった。

服部 克巳

譜 9

J=52

おばばーどこへきゃーるナ ー ナー ナー おーばば どこへきゃる ナー
 よめのーざいしよへナ ー ナー ナー よーめの ざいしよへ ナー

さんじよだる さーげ て ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 ササまご だーきに ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

昭和62年（1987）に日本大衆音楽協会からだされた『現地録音でつづる岐阜民謡』に収録された唄の譜である。演唱者は二代目梅若さんである。譜 5・譜 7・譜 8と同様にお座敷で三味線にのせて大いに歌われたおばばである。唄と三味線との時間的ズレが入ることによって派手に旋律が動いている。座敷や宴席で歌うのにはこの方がよかったのであろう。

譜 11

J=52

おば ばどっこいきゃーるナ ー ナー ナー おーばーば どっこいきやる ナー
 よめ のざ いしよへナ ー ナー ナー よーめーの ざ いしよへ ナー

さんじよだる さーげ て ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 ソリャまご だーきに ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

前出の『岐阜県民謡緊急調査報告書』に収録された唄で、演唱者の笠松町不破十三雄氏は大正13年（1927）生まれである。譜 9と同じ陰類であるが、唄と三味線の時間的ズレがなく、そんなところにまだどこかひなびた感じが残っている。

譜12

J=不明

おーばばーどこへきやるナ ナー ナー おーばばーどこへきやる ナー
 よーめーのーざいしよへナ ナー ナー よーめーのーざいしよへ ナー

さんじよだる さーげ て ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒュルヒュルヒュルヒュル
 ササまご だーきに ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒュルヒュルヒュルヒュル

昭和49年（1974）に笠松町公民館から発行された冊子『神輿 おばば』に掲載されている譜で、演唱者・採譜者は不明である。特記すべきことは、他町村のおばば唄と異なり8小節目の「さんじよだる」のだの音が a^1 となり、そこから後の4小節が陽類になっていることである。おばば唄が以前は陽類であったという名残を留めている貴重な資料である。

しかし、1, 2, 5, 6, 9小節目とあちこちにタイや休符が入り、三味線伴奏による唄の影響を受けていると思われる。

譜16

J=69

おば ば どこいきやるナ ナ ナ おー ばーば どこいきやる ナー
 よめ の ざいしよへナ ナ ナ よーめーの ざいしよへ ナー

さんじよだる さーげ て ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒュルヒュルヒュルヒュル
 ソリヤまご だーきに ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒュルヒュルヒュルヒュル

昭和62年（1987）日本大衆音楽文化協会発行の『岐阜県民謡集』に羽島郡岐南町の唄として掲載されている。

前出の〔譜12〕の笠松町と同じように8小節目・10小節目の a^1 音が a^2 がつき、8小節目から後4小節が陽類である。岐南町は笠松町の隣町、笠松町同様、陽類で歌われていたものが陰類のおばばが広く歌われるようになってから順次変化していったのであろう。

服部克巳

譜17

おばば どこいきやる ナー ナー ナー おーばば どこいきやる ナー
 よめの ざいしょへ ナー ナー ナー よーめの ざいしょへ ナー

さんじょだる さーげ て ソー ラ バ エー ア ヒュラヒュラヒューヒュラヒュラヒュー
 ササまご だーきに ソー ラ バ エー ア ヒュラヒュラヒューヒュラヒュラヒュー

昭和51年（1976）に山県郡高富町で林友男氏が収録したテープから採譜した。演唱者は明治20年（1887）生まれの林隆氏である。

譜20

おばばー どこへきやる ナー ナー ナー おーばば どこいきやる ナー
 よめのー ざいしょへ ナー ナー ナー よーめの ざいしょへ ナー

さんじょだる さーげ て ソー ダ リ エー ア ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 ソリャまご だーきに ソー ダ リ エー ア ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

昭和59年『岐阜県民謡緊急調査報告書』作成に当たり、安八郡墨俣町の今井利蔵氏明治40年（1907）生まれが演唱したテープから採譜した。

この譜で指摘すべき点は最後のはやし言葉の旋律である。まったく同じ旋律を2回繰り返す形のはやし言葉は笠松町の祭り唄の笛の旋律形と同じである。岐阜音頭に影響されない、それ以前からののはやし言葉といえるだろう。

譜21

J=63

おば ば どこいきやる ナ ー ナ ー おー ば ば どこいきやる ナー
 よめ の ざいしょへ ナ ー ナ ー よー め の ざいしょへ ナー

さんじよだる さ ー げ て ソー ラ バ エー (ヒュルヒュルヒュー ドンドンドン)
 サ サ ま ご だ ー き に ソー ラ バ エー (ヒュルヒュルヒュー ドンドンドン)

本年（1998）の5月5日の揖斐祭りに三輪神社境内で収録した。演唱者の成瀬巖雄氏は大正5年（1916）生まれである。

三輪神社から山車を曳いて出る時や帰ってくる時にこの唄を歌う。その時、山車にははやし言葉の楽器がないので、口でヒュルヒュルヒュードンドンドンを入れて歌う。山車は重いので山車を曳く速さに合わせてゆっくりと歌う。

笠松町のおばば唄譜12や岐南町おばば唄譜16と同様に8小節目・10小節目のa¹音に♯がつき、8小節目から11小節までが陽類の旋律になっている。すなわち、揖斐川町に伝播してきた当時（江戸時代後期）には陽類であったことを示す貴重な資料である。

譜22

J=112

おば ば どこいきやる ナ ー ナ ー おー ば ば どこいきやる ナー
 よめ の ざいしょへ ナ ー ナ ー よー め の ざいしょへ ナー

さんじよだる さ ー げ て ソー ラ バ エー ヨイサ ヨイサ ヨイサ ヨイサ
 サ サ ま ご だ ー き に ソー ラ バ エー ヨイサ ヨイサ ヨイサ ヨイサ

これも前譜と同じ本年（1998）5月5日の揖斐祭りに三輪神社境内で収録した。

神輿をつつてきて境内の中央で勢いよく回るときにこのおばばを歌っていた（資料3 写真3参照）。回る速さに合わせるのでかなり早いテンポとなっている。最後のはやし言葉は神輿をつつてぐるぐる回る時はヨイサヨイサという掛け声が変わっている。演唱者は久保田善朗氏、富田和弘氏である。譜21の8小節目に♯があるが、譜22にはついていない。

また、地蔵祭りに、揖斐郡の房島地区では子どもたちが弓張りちようちんを手手に持つ

てこのおばばを歌って町内を回っている（資料3 写真4）。かつては羽島郡川島町、笠松町でもこのようなことをしたと町史に書かれているが、今はもう絶えてしまっている。地蔵祭りにおめでたい孫抱き唄を歌い子どもの無病息災を願ったということなのであろう。

その後本年（1998）8月23日に再度5人の方々に取材をした。富田千秋氏、上田孝氏、宗宮元平氏、宗宮貞夫氏、宗宮多一郎氏におばば唄を歌っていただいた。その中で宗宮元平氏の唄は、陽類で八百津町のおばば唄〔譜28〕と同じ旋律であり、はやし言葉は笠松町のおばば唄〔譜13〕と同じであった。後の4人の方は譜22の歌い方をされた。揖斐川町には陽類のおばば唄を歌われる方はおられないと思っていたが、もっと広く調査をしなければいけないと痛感した。こうしたことから考えると、揖斐川町もおばば唄が伝播してきた当時は陽類であったのだが昭和にはいつてから三味線伴奏で唄う陰類の歌い方に変化していったと思われる。

宗宮元平氏は大正15年（1926）生まれ、この唄を小学生の頃地蔵祭りで歌ったという。近所の方々が話しておられるように、宗宮氏はふだん歌をあまり歌われない方の方である。それが幸いしてか三味線伴奏による陰類のおばば唄にほとんど影響を受けることもなく、昭和初期・小学生の頃に歌ったおばば唄がそのまま口をついて出てきたのだと思われる。

譜23



おばばー どこいきゃる³ーナー ナー ナー おーばば どこいきゃるナー
よめのー ざいしよへーナー ナー ナー よーめのー ざいしよへナー

さんじよだる さーげーてソオンリヤーモ エー
ササまご だーきーにソオンリヤーモ エー (アー) ヒュルヒュルヒュー ドンドンドン

昭和46年（1971）に揖斐郡藤橋村で明治28年（1895）生まれの橋本のえさんが歌ったものを収録採譜した。

最後のはやし言葉は以前は歌わなかったが、戦後揖斐川町あたりで歌っているのを真似して歌う者がでてきたという。しかし現在では歌わないことが多いという。歌ってもすべての歌詞を歌い終わった最後に歌うということである。

藤橋村では、このおばば唄を盆踊りに太鼓を叩き踊りをつけて歌ったり、めでたい時にも歌っている。テンポは $\text{♩} = 42$ で資料とした曲の中ではもっともゆっくりしたものである。

譜24

J=76

おば ばどこいきやる ナー ナー ナー おー ばば どこいきやる ナー
 よめ のざいしょへ ナー ナー ナー よー めの ざいしょへ ナー

さんじよだる さー げ て ソン タ マ エー ア ウイテキター ウイテキター
 ソリヤまご だー き に ソン タ マ エー ア ウイテキター ウイテキター

昭和51年（1976）に林友男氏が美濃市で収録したテープから採譜した。

演唱者は黒田文治氏明治37年（1904）生まれである。最後のはやし言葉はヒュルヒュルヒューではなく、ウイテキタの同形反復の旋律である。同じ美濃市でも陽類のおばば唄 [譜25] はこれより約30年前のものである。この30年間にかなり陰類のおばば唄が広まったことがわかる貴重な資料である。

譜26

J=63

おば ば ーどこへきやるナー ナー ナー おー ばば どこいきやる ナー
 よめ の ーざいーしょへナー ナー ナー よー めの ざいしょへ ナー

さんじよだる さー げ て ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 は つ ま ご だー き に ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

平成9年（1997）関市で渡辺精市氏明治36年生（1903）の演唱から収録採譜した唄である。

最後のはやし言葉の旋律は前記の譜20・譜23・譜24と同様に同形反復している。

この同形反復のはやし言葉は江戸時代後期からすでに奏されていたと考えられる笠松町のボボ車の笛の旋律を口ずさんでいるもので、昭和の始め頃から流行した岐阜音頭の反行反復のはやし言葉より古いものである。しかし、旋律は陰になっており、三味線演奏で歌われたおばば唄の影響をかなり受けている。ちなみに同じ関市でもかって農村部であった関市平賀の井桁氏の演唱は陽類である。

譜29

♩=84

おばば どこいきやる ナー ナー ナー おーばば どこいきやる ナー
 よめの ざいしょへ ナー ナー ナー よーめの ざいしょへ ナー

さんじょだる さーげ て ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー
 はつまご だーきに ソー ラ バ エー ヒュルヒュルヒューヒュルヒュルヒュー

昭和55年（1980）『愛知県民謡緊急調査報告書』に添付されていた多くのテープの中で、おばば唄はこの祖父江町の山田いわさん演唱の1曲だけであった。

中島郡祖父江町は笠松町から舟で往来できる地点にあり、このように木曾川に接した愛知県の市町村にも伝播していったものと考えられる。

この唄は、10小節目のソーラバエーのラの言葉の a¹音に ♯がなく、曲全体が陰類である。また、この歌詞の後に「岐阜はよいとこナー」を歌っている。昭和初期に大いに歌われた岐阜音頭の影響が感じられる。

2 旋律の使用音と頻度量

陰類のおばば唄で同じ使用音のものをグルーピングするとA～Dまでの4グループに分かれる。陽類の場合と同様に8分音符を1としてその長さを集計した。

その結果は、次のようであった。

- (1) 1番使用頻度量が多いのは各唄とも g¹ (ト) 音、2番が c² (ハ) 音、3番が d² (ニ) である。
- (2) 陽類が混入したものはAグループの譜24、Bグループの譜11で、使用音は g¹, as¹, a¹, c², d², es², f¹ (ミファ#ファラシドレ) である。
- (3) 使用音が g¹, as¹, c², d², es², f¹ (ミファラシドレ) の曲はCグループの [譜29] である。
- (4) 使用音が g¹, as¹, c², d², es² (ミファラシド) の5音だけの曲はDグループの譜23である。

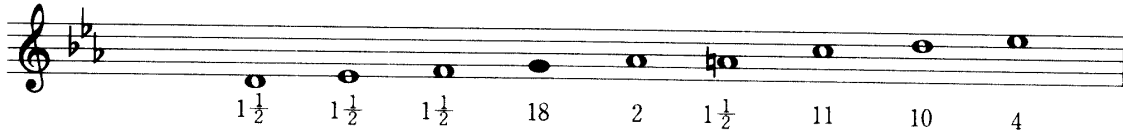
Aグループ… 譜1, 譜6, 譜8, 譜9, 譜12, 譜17, 譜20, 譜21, 譜22, 譜24, 譜26, 譜24

譜24

1½ 3 15½ 3 1½ 13½ 7½ 3

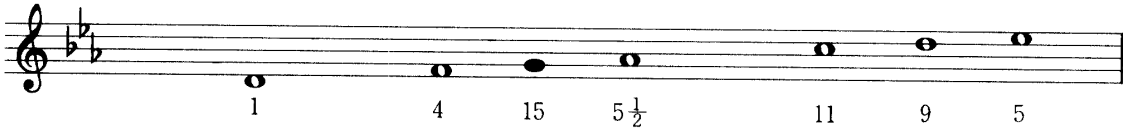
Bグループ… 譜2,譜4,譜5,譜7,譜11,譜16

譜11



Cグループ… 譜3,譜29

譜29



Dグループ… 譜23

譜23



3 旋律の比較考察

陰類おばば唄 20 曲の中から、代表的なもの8曲を選んでその差異を考察した。方法は陽類の場合と同じくA～Eの5区分にして行なった。

なお、わかりやすくするためにおばば唄の転類・転旋均の一覧表を下に付けた。

陰類 b_b 均ミ旋法

陽類 b 均ソ旋法

譜No.	収録地・演唱者	A				B			C		D		E	
		A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	C1	C2	D1	D2	E1	E2
譜1	岐阜市・岩田禮子													
譜9	岐阜市・二代目梅若													
譜11	笠松町・不破十三雄													
譜12	笠松町・神輿「おばば」の本													
譜22	揖斐川町・久保田善朗他													歌わない
譜23	藤橋村・橋本のえ													歌わない
譜24	美濃市・黒田文治													
譜29	祖父江町・山田いわ													

A区分…A1の譜11・譜22・譜24は $g^1-c^2-g^1$ (ミラミ) と完全4度を上下する旋律で素朴などっしりした感じがする歌い出しである。そこだけを取り出せば陽類の出だしと同じ

服部 克巳

	A				B		
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3
譜 1	おばばどこいきやる ナー ナー				おーばば どこいきやる ナー		
譜 9	おばばーどこへきやるナー ナー				おーばば どこへきやる ナー		
譜 11	おばばどっこいきやるナー ナー				おーばばどっこいきやる ナー		
譜 12	おばばーどこへきやるナー ナー				おーばば ーどこへきやる ナー		
譜 22	おばば どこいきやる ナー ナー				おーばば どこいきやる ナー		
譜 23	おばばー どこいきやるーナーナー				おーばば どこいきやる ナー		
譜 24	おばばどこいきやるナー ナー				おーばば どこいきやる ナー		
譜 29	おばばどこいきやる ナー ナー				おーばば どこいきやる ナー		

である。他の譜は陰類らしい優雅でしっとりした出だしである。

A2 では譜9・譜12の1拍目はタイになっており、三味線伴奏の唄の影響を受けたことをはっきり表わしている。つまり三味線の音の入りと同時に歌うと唄がよく聞こえないので、三味線の音が入ってから遅れて歌いだす歌い方になっている。

A3の譜23は他の旋律と異なった動きである。

A4の譜11はA1で指摘したように陽類と同じ出だしの完全4度の下行があり、陽類おばば唄のおもかげを留めている。

A区分は8曲とも $g^1, a s^1, c^2, d^2, e s^2$ (ミファラシド) の陰類 b_b 均のミ旋

民謡「旋律」の伝承研究

	C	D	E				
	C1	C2	D1	D2	E1	E2	
							演唱者 岐阜市 岩田禮子さん
							岐阜市 梅若くに子さん
							笠松町 不破十三雄氏
							笠松町 神輿「おばば」 から転載
							揖斐川町 久保田善朗氏 富田和弘氏
							藤橋村 橋本のえさん
							美濃市 黒田文治氏
							祖父江町 山田いわさん

法である。

B区分…譜9・譜12のB1, B2はA2で述べたように、休符が入る三味線伴奏の歌い方である。また、B2の2拍目からB3へ入る旋律には $g^1-f^1-g^1$ (ミレミ) と $g^1-e s^1-g^1$ (ミドミ) の2通りがある。すなわち譜1,譜9,譜12,譜22,譜24,譜29が $g^1-f^1-g^1$ (ミレミ) で、譜11,譜23が $g^1-e s^1-g^1$ (ミドミ) である。前者の $g^1-f^1-g^1$ の f^1 は陰類の基準の音 g^1 (ミ) への導音的な変化によって $e s$ の音が f になった臨時の変化音とみて、そのままこのB区分もA区分に引き続いて陰類 b_b 均とみる。

C区分…譜1,譜9,譜11,譜22,譜23,譜24,譜29はA区分～C区分まで b_b 均である。

D区分…D区分の譜1,譜9,譜11,譜22,譜24は陽類 \sharp 均ソ旋法になる。

譜12はC区分から陽類 \sharp 均に転類・転均しD区分まで続く。譜16,譜21が該当する。
譜23,譜29はA区分の始めからD区分の終わりまで一貫して陰類 b_b 均である。

E区分…譜22,譜23のようにこのE区分を歌わないという場合はD区分のD2が終止音であろう。したがって譜22は陽類 \sharp 均ソ旋法で終わり、譜23は陰類 b_b 均ミ旋法で終わっていることになる。譜22,譜23以外の譜1,譜9,譜11,譜12,譜24,譜29もD2で終止しているものとみなし、E2の最後の音は陰類 b_b 均ミ旋法の半終止であり、それはまた前奏あるいは間奏の役割をしているものとする。

譜24のE区分は、E1の同形反復でE2を歌っており、他の譜の反行反復より古い旋律形の名残を留めている。

IV 「旋律」の伝承について

ひとつの民謡が一世紀を経て歌われると、その旋律はそのまま受け継がれるのが普通のように思われるが、実は歌い手が替わることの他に意外と時代や社会状況の変化に影響され、その旋律自身が微妙に変わってきていることをおばば唄の楽譜を資料として紹介してきた。

平成年度に入って再度おばば唄に関して調べた結果、おばば唄の旋律が伝承の過程で陽類から陰類に変化した歌い方はおおまかには次の三つに分かれる。

(1)現在も陽類で歌う (2)陰類に変化したか、一部分だけ陽類で歌う (3)全部陰類で歌う

(1) 現在も陽類で歌い継がれているのは笠松町の祭礼の時のおばば唄だけである。

また、八百津町・可児市周辺では陽類で歌い陰類で歌うことは無いのだが、近頃ではそれもほとんど歌う人もいなければ機会もないのが実情である。それと揖斐川町の1例だけであった。

(2) 一部分(後半の4小節だけ)を陽類で歌っているのは笠松町のおばば唄(冊子『神輿おばば』に掲載)と隣町の岐南町および揖斐川町の一部の人であった。最後のソウラバエだけを陽類で歌うのは、岐阜市および中濃・西濃地方一帯でまだ多く残っている。

(3) 全部陰類で歌うのは藤橋村と祖父江町の2例であった。

藤橋村では、なぜか昔から陰類で歌っていた。昭和40年頃に第1回目の調査、平成に入り2回調べたが、すべて変わらず陰類で歌っている。

次におばば唄がどのようにして陽類から陰類に変化したか、その理由や背景について触れることにする。

(1) 庶民の文化ともいえる民謡は仕事や祭礼や祝い事のおりに歌われていた。本来おばば唄は陽類であった。目出度ばやし・孫祝い唄ともいわれ、その旋律は明るく陽気なもので、美濃地方や尾張地方北西部で広く歌われていた。その後、庶民の生活に娯楽的要素

が入り込んで三味線伴奏にのった陰類の歌い方に変わるのだが、遠隔地ではそのような娯楽的要素と縁遠く、その結果陽類のまま残ったと思われる。

しかし、現在では社会の変化に伴い、歌う機会そのものが少なくなった。^{註3}

- (2) 近世から昭和に入り社会状況の変化に影響され、おばば唄の旋律自身が微妙に変化している。おばば唄の岐阜音頭への節調を担当した杵屋喜多六氏は祝い唄を捨てがたかったのかソウラバエを陽類で残した。それで陰類－陽類－陰類または陰類－陽類と陰類で歌い始めながらも転類・転均した唄になったと考えられる。このソウラバエを掛け声という説^{註4}もある。
- (3) 岐阜音頭の影響は大きく近隣の町村でも、笠松音頭、揖斐川音頭、墨俣音頭などが作られた。おばば唄の歌詞そのままの次にその地の様々な事象を取り入れた詞を作り、三味線伴奏（陰類）で歌っていた。はやし言葉も岐阜音頭のはやし言葉のような反行反復の旋律がつけられ、それが広まり、さらにタイや休符が入って陰類独特のムードを醸し出すおばば唄となり陽類の旋律の素朴さは消えていったのである。

V おわりに

おばば唄に関して、歌詞の面から旋律の面から調査追求をし十数年を経たことになる。そして、今回その結果と考察をここにまとめることができた。

今後の課題としてまだ気に懸かっている点は、おばば唄で踊る「踊りの形態」を調査すること、また地形唄のおばば唄について調べることを通して、本研究との接点をいっそう深めたいと考えている。

現在民謡の流れとしてふたつが考えられる。一つは新しいものを生み出していくという流れ、もう一つは受け継いできたものを大切に保存し伝承していくという流れである。こうしたおりに、郷土の民謡研究をすることは意義のあることと考える。今後できるだけ色々な角度から“おばば”の研究を続けていきたい。

最後に本研究を進めるにあたって、快く資料を提供して下さった方々やご協力をいただいた方々に心から厚くお礼を申し上げます次第です。

註

- 1) 昭和のはじめに岐阜音頭が作られたことに端を発し、岐阜音頭と同じ旋律（陰類）で歌う墨俣音頭、笠松音頭、揖斐川音頭が作られた。
- 2) 東川清一氏からの書面の回答による。
- 3) 服部克巳「民謡<おばば>の発祥と伝播」『本学紀要第30集』1997 p41
- 4) 畠山兼人編『民謡新辞典』明治書院 1997 p181

参考文献

- 広島高等師範附属小学校音楽部編『日本童謡民謡曲集』 1933
日本放送協会編『日本民謡大観 中部篇（中部高地東海地方）』 1960
岐阜県教育委員会編『岐阜県民謡緊急調査報告書』 1984
岐阜女子師範学校編『岐阜県郷土研究』 1938
岐阜県音楽教育連盟編『みんなで歌おう 小中学校版』 1961
三隅治雄他編『日本民謡全集3 関東中部編』雄山閣 1975
長田暁二・千藤幸蔵編『岐阜県民謡集』日本大衆音楽文化協会 1987
長田暁二編『現地録音でつづる岐阜民謡』 1987
笠松町公民館編『神輿おばば』 1974
愛知県教育委員会編『愛知県民謡緊急調査報告書』 1980
美濃民俗文化の会編『美濃民俗 No47』 1971
松本民之助著『日本旋法のソルフェージュ』明治図書 1969
松本民之助著『音楽基礎技法』音楽教育図書 1962
松本民之助著『日本旋法』音楽教育図書 1965
新音楽教育研究会編『統合版 楽しい音楽』音楽教育図書 1971
文部省『日本の音楽の指導』東山書房 1973
池田富造著『最新幼児音楽教育法』ひかりのくに 1974
東川清一著『日本の音階を探る』音楽之友社 1990
東川清一著『音楽理論を考える』音楽之友社 1982
東洋音楽学会編『日本の音階』音楽之友社 1987
小泉文夫著『日本の伝統音楽の研究』音楽之友社 1966
町田嘉章・浅野健二編『日本民謡集』岩波書店 1960
諸井三郎著『音楽教育講座・第三巻・器楽と創作編』 1952

民謡「旋律」の伝承研究

〈資料1〉各地のおば唄採譜一覧表

譜 類	収録地	演唱者（生年）	採譜資料	収録・採譜者
1 陰	岐阜市	岩田禮子（1915）	『岐阜県民謡緊急調査報告書』	岐阜県教育委員会（1984）服部克巳
2 陰	岐阜市	不詳	『岐阜県郷土研究岐阜地方の民謡』	岐阜女子師範学校（1938）松田鐵雄
3 陰	岐阜地方	不詳	『みんなで歌おう 小中学校版』	岐阜県音楽教育連盟（1961）松島 昇
4 陰	岐阜市	不詳	『日本民謡全集3 関東中部編』	雄山閣（1975）松尾健二
5 陰	岐阜市	不詳	『岐阜県民謡集』	日本大衆音楽文化協会（1987）千藤幸蔵
6 陰	岐阜市	不詳	『岐阜県民謡集』	日本大衆音楽文化協会（1987）千藤幸蔵
7 陰	岐阜市	芸妓小蝶（不詳）	『NHK日本民謡大観』	日本放送協会（1960）NHK
8 陰	岐阜市	芸妓金太郎（不詳）	レコードから収録したテープ	不詳 服部克巳
9 陰	岐阜市	二代目梅若（不詳）	『現地録音でつづる民謡岐阜』	日本大衆音楽文化協会（1987）服部克巳
10 陽	岐阜市	不詳	『日本民謡童謡曲集』	広島高師附属小音楽部（1933）村上國蔵
11 陰	羽島郡笠松町	不破十三雄（1923）	『岐阜県民謡緊急調査報告書』	岐阜県教育委員会（1984）服部克巳
12 陰	羽島郡笠松町	不詳	『笠松民謡神輿「おば唄」』	笠松公民館（1974）
13 陽	羽島郡笠松町	高島英一（1920）	現地収録	服部克巳収録（1997）服部克巳
14 陽	羽島郡笠松町	吉井 朗（1938）	現地収録	服部克巳収録（1998）服部克巳
15 陽	羽島郡笠松町	ボボ車の唄数人	現地収録	服部克巳収録（1998）服部克巳
16 陰	羽島郡岐南町	不詳	『岐阜県民謡集』	日本大衆音楽文化協会（1987）千藤幸蔵
17 陰	山県郡高富町	林 隆（1887）	現地収録	林 友男収録（1976）服部克巳
18 陽	山県郡美山町	藤田よね（1906）	現地収録	長屋とも子収録（1988）服部克巳
19 陽	本巣郡根尾村	洞口福太郎（1891）	現地収録	林 友男収録（1972）服部克巳
20 陰	安八郡墨俣町	今井利蔵（1907）	『岐阜県民謡緊急調査報告書』	岐阜県教育委員会（1984）服部克巳
21 陰	揖斐郡揖斐川町	成瀬巖雄（1916）	現地収録	服部克巳収録（1998）服部克巳
22 陰	揖斐郡揖斐川町	久保田善朗（1946）他	現地収録	服部克巳収録（1998）服部克巳
23 陰	揖斐郡藤橋村	橋本のえ（1895）	現地収録	服部克巳収録（1971）服部克巳
24 陰	美濃市	黒田文治（1904）	現地収録	林 友男収録（1976）服部克巳
25 陽	美濃市	井川金松（不詳）	『NHK日本民謡大観』	日本放送協会（1948）NHK
26 陰	関市	渡辺精一（1903）	現地収録	服部克巳収録（1997）服部克巳
27 陽	関市	井桁 潔（1933）	現地収録	林 友男収録（1992）服部克巳
28 陽	加茂郡八百津町	赤塚すず（1903）	『岐阜県民謡緊急調査報告書』	岐阜県教育委員会（1984）服部克巳
29 陰	愛知県祖父江町	山田いわ（不詳）	『愛知県民謡緊急調査報告書』	岐阜県教育委員会（1980）服部克巳

註1 譜5は「岐阜音頭」として採譜されたもの

2 譜4から譜9までは三味線伴奏付きで歌われている

〈資料2〉昭和46年の『美濃民俗』（美濃民俗文化の会編）へ徳田氏の投稿文

—————昭和46年の手記より原文のまま転載—————

私は加茂郡八百津町生まれで二才時父がなくなりましたので祖父徳田徳七の後継者と成り伏見上恵土の現在の所へ移住して今日に及んで居ます。物心付く頃より祖父は新村組の祭礼、寄合、御日待（集会）等には必らず私を連れて出席しました。集会は酒宴になれば歌となり必らず最初は伊勢音頭の石突歌、次は岐阜の民謡「お婆々」が歌われるのが常でしたので今でも私は当時の有様をヨク記憶して居ります。今より六十五～八年前の事です。ラジオが発達して放送を聞くようになり気が付いたのは当時私がくどい程聞いた「お婆々」とは相違いハヤシ歌が（受け歌）無く歌の後がヒュルヒュルヒューというのに不審を感じ高年者に此の相違を話して調べましたところヒュルヒュルヒュー等と歌って居った事は昔は絶対に無かった事が順次判明しました。其の後の調べでは岐阜以西ではヒュルヒュルヒュー岐阜以東、中濃、東濃地区では私の聞いた通り歌われて居った事が判かりました。証明者の地区の有り方から見ても判断できます。

可児郡御嵩町伏見中町 徳田熊三郎（73才）明治32年生

証 明 者

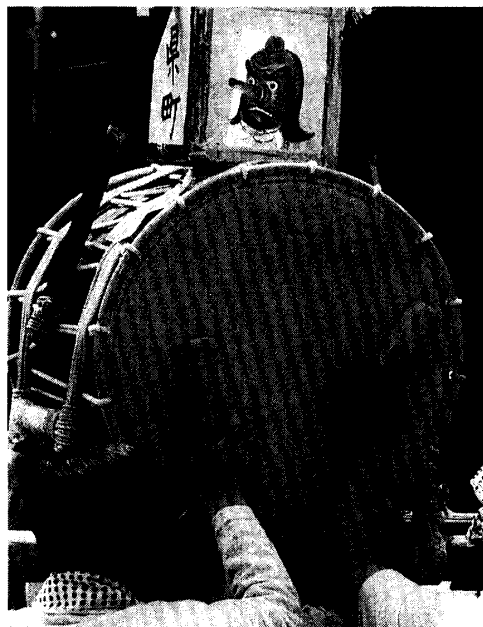
可児郡御嵩町伏見新町	梅田嶋三郎	（76才）生存
可児郡御嵩町伏見新町	梅田代五郎	（77才）生存
可児郡御嵩町伏見新町	梅田富士男	（94才）生存
可児郡御嵩町伏見新町	梅田三蔵	（78才）生存
恵那郡中之方出身	浅野氏母堂	（96才）3年前死亡
土岐郡日吉村宿洞	三輪六三郎氏母堂	（89才）10年前死亡
可児郡御嵩町中	伊佐治藤吉	（95才）生存
可児郡兼山町宮町	岡田こま	（96才）1昨年死亡
可児郡御嵩町伏見	玉田とく	（94才）昨年3月死亡

〈資料3 写真1〉笠松祭りのボボ車

ちょうさいから少しはなれてついていく。



ボボ車の太鼓と桴

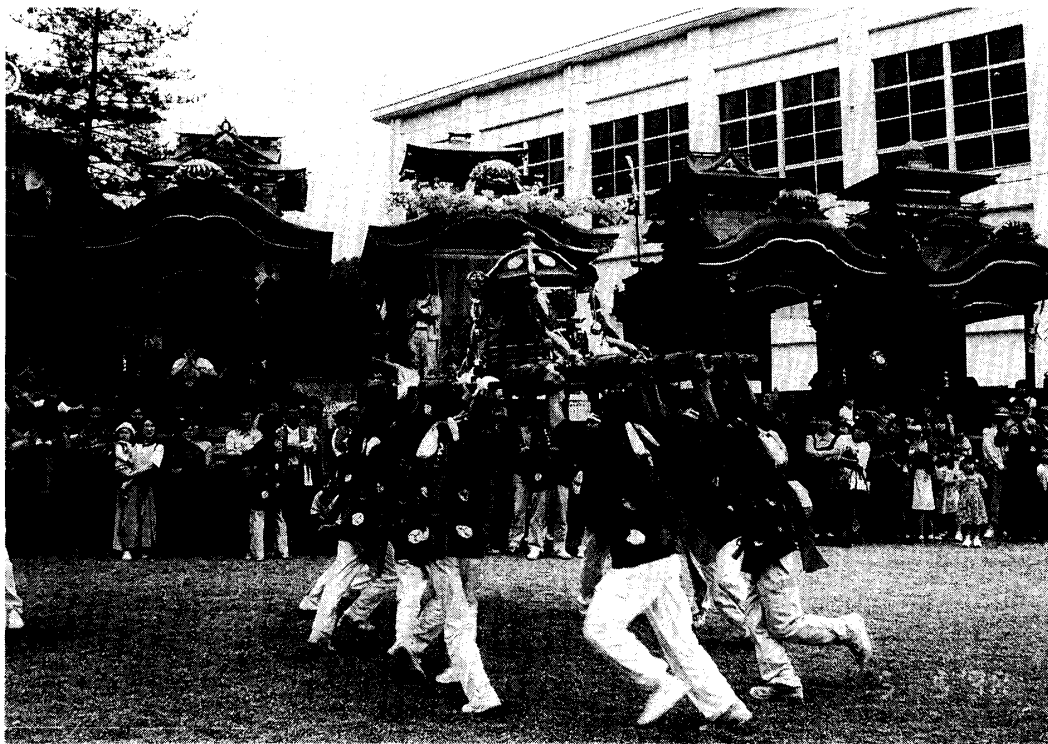


〈資料3 写真2〉笠松祭りのチョウサイ（通称花みこし）

肩にかつがないで手でつっていく。



〈資料3 写真3〉揖斐祭りの神輿回し 三輪神社境内にて。



〈資料3 写真4〉房島地区地蔵祭りでおばばを歌いながら町内巡り。

